

# 北京・西安・蘇州見聞記

藤 堂 恭 俊

## はじめに

このたびは、重要案件をひっさげての訪中だったので、出かける前から気が重かった。と言うのは外でもない、昨年五月、西安市の郊外、長安県神禾原に再建された香積寺で、日中両国の道俗三百人によって、善導大師の一千三百年遠忌法要を奉修した際、寺域内にそびえたつ十三層の大塔内部を、いかに莊嚴し、なにを安置するか、という日中両国の当局がともに荷負った課題にたいして、当方として数次重ねた協議の結論を解答としてたずさえ、趙会長先生を始めとする中国仏教協会のかたがたに当方の用意した原案を示し先生の意見を拝聴し、協議を重ねること、さらに当方の原案を実現するにあたって必要な、塔内部の実測を現地で行うこと、また浄土宗の研究留学生を中国に派遣する件、中国浄土教のメッカとして、香積寺の再建と時を同じくして修復工事が行われていた靈巖山寺に、浄土宗として始めて表敬訪問し、かねて同寺内に、旧臘発足をみるに至った中国仏学院蘇州分院の実状を視察することが目的であったからである。

「産むは案ずるよりも易い」という諺どおり、武田宗務総長、竹田社会局長、宗務庁の

山添、本学の宮口両君といった至って気ごころのわかった少人数で、しかも六泊七日という短期間の旅行だっただけに、予定の変更に  
よる気ぜわしさを除いては、終始たのしくな  
ごやかに過すことができた。

磧砂版蔵經の里帰り・

## 本学の中国研究留学生

五月十八日北京入りした私たちは、空港でお出迎いを頂いた正果法師、王紹佑氏、孫培玉氏から、趙樸初先生が入院中であると知らされ驚くとともに、訪中の成果を危ぶみ、気重にならざるを得なかった。一行は燕京飯店に旅装を解き、明日に迎える会議に控えていたところ、二十日朝、空路西安に向う予定のところ、座席がとれなかったため、前日の十七時発の火車に乗りこむようにとの連絡を受けた。出発に際しては、大阪国際空港で前代未聞とでも言うべき塔乗人数の数え違いという初歩的ミスによって、一時間も離陸が遅れるなど、今度の旅行はついてないなあ、と溜め息をついたことであった。夕食後、北京放送局の日本語放送のスタッフの一人である潘琦民女史の来訪を得、武田総長と三人で、一九七八年および昨年の訪中時の思い出や四方

山話に花を咲せ、たのしい一時を送り、もやもやした気持ちもいくぶん晴れたことであつた。あけて十九日の朝市内の西部、阜成門内に位置する広済寺に詣でるとともに、同寺内の中国仏教協会を表敬訪問し、続いて香積寺の大塔内部莊嚴の一件について協議を重ねた。趙先生は病中、医師の許しを乞うて協議に臨まれ、宗祖法然上人が夢中において善導大師に对面された、いわゆる「二祖対面」の情景を、一階の壁面を利用して立体的に彫刻によって表現する、という当方の原案に耳をかたむけ、原案を具体化した彫刻の模型に見入って下さったので、感激も一入深く、安堵し、胸をなでおろしたことであった。

この広済寺は具名を弘慈広済寺と称し、解放後、二度にわたって大規模な修復が行われたが、その創建は十三世紀、即ち金代末期に遡り、明代の成化年間（一四六五—一四八七）に再建され、西劉村寺を今の寺名に改めたという。大雄殿には釈迦三尊を安置しているが、その後壁一杯に指頭画の大作「勝果妙因図」——釈迦如来説法の図が描かれている。指頭画とは指先に墨をつけて描いた絵画のことであるが、その製作年代は「乾隆甲子」（一七四四年）という銘によって知ることができ

る。誠に珍しい作品である。指頭画を読経のあと拝見して、会議のための別棟に移ったため、この寺に収蔵している唐代の顕慶三年・五年（六五八・六六〇年）、懿章二（六六九）年、文明元（六八九）年の銘を持つ小形の石造仏像や、敦煌写経の断簡、北宋・南宋の刊記を持つ経巻、元代の金銀字写経、さらには三万余枚という実に膨大な房山石経拓本など拝見する機会はなかった。

筆者は昨年八月下旬、敦煌からの帰途この寺で、「一切経南都善光院」という朱の蔵印を巻首に持つ経典が展示されているを見、巻



磧断经版藏砂磧

末の奥書はどうなっているだろうか、あるいは良定の筆跡を見出せないだろうかと思ひ、機会を得て調査したい念願にかられていた。今般の訪中は公的な性格を持ってはいるが、この調査は単なる私的なことでなく、入明を企図して果さなかった浄土宗の傑僧の一人である袋中良定（一五五二—一六三九）にかかわることであるから是非調査したい、と出発前から一行の同意を得ていたので、時間を頂いて拝見させて頂いた。

朱印に「一切経南都善光院」とあるのは、七十一歳（一二二二年）の良定が、南都に創建した降魔山善光院念仏寺（現在、奈良市漢国町一七油阪大宮本通りの念仏寺として現存）に一切経を完備さすべく、「哀集南都西京諸刹之零本残篇——以合釋大藏經全部——今収一弃于寧樂念仏寺——者是也」（養鶴徹定著『古経搜索録』序）と指摘されている蔵経を指している。寛延二（一七四九）年作の『袋中上人伝』を繙くと

元和八年上人七十一歳、其夏南都諸伽藍を經過し、仏像祖影を拝し、杖を支えて眉目山の辺に憩給ふ。仏事をなすに便りよき勝地のありければ蕭寺を草創して降魔山善光院念仏寺となづく。その頃浄琉璃寺の殿

堂破壊に及ければ、関本の一切経をあがなひて修復せんと、衆僧の評議一定しぬ。上人これをきき、使を遣し若干銀を贈りて、經典を奉請す。後に脱卷逸帙の経論をば或はみづから書写し、或は他をたのみて書写せしむ。これによりて経論缺ることなく一藏全備せり、その中に紺紙金泥の経論多し。今南都念仏寺の蔵本これなり。

と記され、良定が一切経を完備するまでの経緯を読みとることができる。

展示されていたこの經典は、幸い巻首があり、初行には「二経同卷」とあり、その下には「一切経南都善光院」の朱印が捺印。第二行には「大方広菩薩藏文殊師利根本儀軌經」とあり、第三行には「卷第十九」とあり、その下に二行にわたる「中国仏教協會藏書」という朱印がおされ、第四行には第二行と同じ經典名を記し、第五行には「卷第二十」とあり、第六行には「大方広菩薩藏文殊師利根本儀軌經卷第十九」とあり、第七行にはやや字を小さくして「西天訳経三藏朝散大夫試鴻臚少卿明教大師臣 天息災奉 詔訳」とあり（第五行の中央と第六・七行とは破損あり）、第八行には「如来藏大法宝法界相無數功德祥瑞品第二十六」とあり、第九行以下が经文と

なっている。この經典は密教部に属する全二十卷からなる經典である。

卷末奥書はと関心のほどを示したが、いかんせん三十六行の残簡であつたので、私の淡い望みは消え去ってしまった。期待していただけに拍子ぬけで、あつてなく幕切れとなつた。この残簡は折本形式の板本で磧砂版であり、一帖十七字詰の六行が六帖だけで、タテ二十六・五センチ、ヨコ六十八センチというサイズであつた。帰国後、大正藏經と照合してみると第二十卷・九百頁上段から中段第十一行目の第一字までと言うことが判明した。この断簡がいかなる経緯をたどつて、ここ中国仏教協會に納められたか知る由もないが養鶴徹定（一八一四—一八九一年）は嘉永五（一八五二）年、念仏寺蔵の経巻を購入しているから、幕末ごろ流出し、中国に渡つたのであろう。まさに磧砂藏經の里帰りと言つても過言ではあるまい。徹定が念仏寺から購入した古經の類は師によつて門跡在職中に知恩院に寄贈されていることを思うと、善光院念仏寺の旧藏經典であると言う点で、姉妹経巻が日中兩國に現存していると言つべきであろう。なお徹定の収集になる念仏寺旧藏の古經巻にして知恩院に収められたものについて

は、拙稿「養鶴徹定の古經蒐集と南都念仏寺蔵古經」（『藤原弘道先生古稀記念史学仏教学論集』所収）を参照されたい。

本年二月、中国仏教協會から本学に二名の研究生が派遣され、本学の黒谷学寮に寄宿し、本学で受講している。その一人は中国仏学院講師の伝印法師であり、他の一人は中国仏教圖書館員の姚長寿居士である。それ



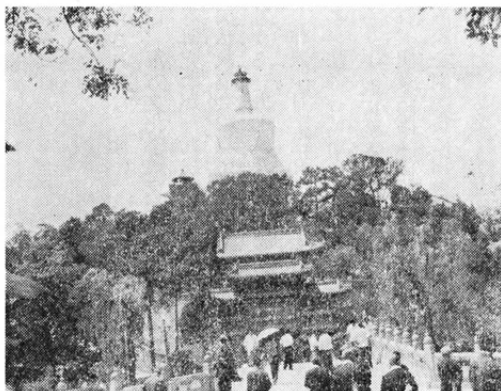
大阪国際空港にて中国留学生の出迎え  
左から姚、伝、竹田、筆者、宮口、大阪駐在馬中国副領事の諸氏

それ研究課題を持ち、法師は「日本における仏教教育について」、居士は「仏教圖書・文物を中心とした中日交渉史の研究」にとりくんでいられる。筆者は出発にさきだつて留学生について心配されている趙先生のために、お二人におたのみして近況報告をカセットに収めて携行した。会議終了後このお二人による声のたよりを、趙先生は録音器に耳をよせて、終始満足気に、顔を綻ばせながら聞き入っていられる様子に、わが子をおもう親ごころにかよう、あたたかいものを感じずにはいられなかった。

なお、この席上で中国仏教協会に、本学善導教学研究会編『善導教学の研究』（東洋文化出版刊）と、浄宗会・大正大学・西山短期大学・本学が関係した戸松啓真編『善導教学の成立とその展開』（山喜房仏書林刊）を本学から贈呈。藤吉慈海編『善導大師の浄土教』（浄土宗学研究所刊）を知恩院より、さらに善導大師一千二百五十年遠忌に際してつくられた善導大師絵伝掛軸一幅を筆者より贈呈し、大いに喜ばれた。なお時間の余裕がなく、日本の仏教音楽の資料についてお便りを頂いていた、北京居士林の凌海成居士にお会い出来ずに失礼したことが心のこりである。

#### 法源寺・中国仏学院

会議が終つてから、故宮博物院の西北に位置する北海公園内の料亭「仿膳」で、趙会長招待の午餐会に臨んだ。当日は火曜日というのに公園のなかには日曜日さながらの人の出



北海公園入口から瓊華島の白塔を望む

費して、大規模な修築工事が行われ、今日の規模を完成させたと言う。仿膳は清朝王宮の調理を模倣しているとかで、油っこくなく淡泊な味が特徴のようであった。テーブルの掛布やナプキンの類は清朝王宮が好みとする黄色であるのに奇異な感じをいだいた。

ついで一行は時間的余裕がないので追われるようにして法源寺をたずねた。法源寺は、昨年わが国の唐招提寺の鑑真和尚像が里帰りされたとき、揚州の大明寺、北京の中国歴史博物館について、最後のお別れ展観場となった寺院として市民に親しまれ、北京市街のなかの広安門に在る。唐代には寺名を憫忠寺、遼代には遠愍寺と称したが、その位置は唐代と同じで変わらず、伏蓮華弁が彫られた唐代の貞観十九（六四五）年創建当時の柱基の上に、現在の建物が建てられているという。

寺内には唐朝の逆臣として著名な安祿山とともに業を同じくした史思明（一七六一年）が建てた「浄光宝塔頌」―古い中国では珍しく向って左から右へ縦書きされた碑が壁面にはめこまれている外、船形光背をもつ北齊代の石仏像、唐代の咸亨三（六七二）年の銘を持つ釈尊像、後唐代の同光二（九二四）年の銘のあつた鑄鉄菩薩像、遼代の応曆七（九五七）年の

銘を持つ陀羅尼經石塔、北宋代の紹聖元（一九四）年の銘がある觀世音菩薩舍利記や、明代の作製になる宣徳で造られた「千仏繞毘盧」——頂部に毘盧舍那仏一尊を配し、その台座に続いて四仏が四方を向き、その下部の鐘形をした千華台に千仏が浮彫されている異様な作品など、得がたい仏教文物を多数展観している外、かの著名な房山（河北省、北京市西南五〇キロ）雲居寺の石經資料——たとえば「開山琬公之碑」（遼金代の刻、琬公とは法源寺の東に隣接していた智泉寺の静琬のことで、房山における經典石刻事業の発願者。隋大業年中〔六〇五—六一七年〕に聖業に取



法源寺僧房に房山雲居寺石經資料を参観

り組み、唐・貞観十三（六三九）年寂）などの拓本数十点を展示している。静琬の畢生の聖業であるこの石刻經典を達成するという志は、その後遼・金・元・明の各時代に、漢・満・蒙・高麗・西蔵の諸民族によって受けつがれた。その資料が静琬滅後千三百四十余年の星霜を経過した今日、彼が居住していた智泉寺の西隣の寺院である法源寺において展示されるとは、誠に因縁の不可思議に思いがいたされてならない。房山石經について古くは、東方文化学院京都研究所から『房山雲居寺研究』が一九三五年に刊行され、近くは中国仏教協會編『房山雲居寺石經』が文物出版社から一九七八年に刊行されている。

昨秋十月十三日発足をみた中国仏学院は、この法源寺に所在し、寺内の僧房に十八歳から三十歳に至る学生四十名が僧房に収容され、明真法師（法源寺住職）を院長に、李時雨氏を副院長に頂き、約十名の先生方の指導を受けている。発足と言っても、実は解放後の一九五六年に創設され、四人組横行の期間一時閉ざされていたに過ぎない。既にこの学院の予科・本科・研究科を卒業した三百八十名の学僧は、研究や、全国各地で仏教文物や寺院の管理に貢献しているという。放課後であ

ったので授業参観はできなかったが、坐禅にあてられている広い一室を見せて頂いた。寺内を散策している雛僧、つまり学院生をみかけたり宿舎にあてられている僧房の前を通りぎわに、整頓され、いかにも清潔な内部の様子を、開かれていた扉の間からのぞき見ることができた。

学院生は経律論の三蔵の外、歴史、国語、時事・政府の政策を始め、日本語と英語の学習に励んでいる。聞くところによると、学院生は入学後、まず沙弥戒をうけ、ついで本年一月に具足戒を受けているという。やがては菩薩戒を受けることが予想される。このような教育姿勢に、この学院の性格を垣間見ることができるといふことは仏教の単なる客観的理解よりも、本当に仏法を生きる人材の養成を企図していることが推察されるからである。ともかく、広大な中国全土に散在する大多數の寺院に、今なおみられる文革（一九六六—一九七四年）中に受けた破壊行為の後遺症をのりこえ、四つの現代化を指向する社会主義体制下の中国において、仏教復活の息吹きを感じずにはいられなかった。一九七八年訪中した際に、趙先生から拝聴した「四人組が逮捕され、晴れ晴れした心を取りもどし

た」という述懐が、耳底によみがえって来るのを禁じ得なかった。

### 長安草堂寺・蘇州寒山寺

私たちの乗車した火車が特快であったか、直快であったか忘れたが、二段式ベッドを左右にもつ個室型の軟臥車（これに対して、硬臥車は三段ベッドの開放型）、さしずめ日本のA寝台車の人となった。車体の幅が広いのでゆったりしている。窓際には造りつけのテーブルがあり、その上に電気スタンドの外、魔法瓶と茶器が置かれているから、常時あたたかい茶が飲めるようになっていた。食事ときには餐車に移って夜・朝・昼の三食を頂いた。私たちは、夜は中華定食、朝は粥、昼は特別にお願いして麺子にして頂いた。なかなかサービスよろしく快適であった。かくして二十日十三時五十五分、西安に到着。宿舎の人民大厦に入り、小憩の後、大興善寺（伽藍は立派であるが、文革によって仏像・仏具の類はすべて失われたままである）に陝西省仏教協会を表敬訪問。同会長の興教寺住職常明法師や、昨年五月ご厄介になった関係者と再会できて懐しい一時を送った。夜は西安市対外友好協会副会長魏明中先生の招待宴に臨み、ここでも宗教事務処の李淑賢女史など、

昨年お目にかかった先生方などやかに食事の一時を送ることができた。

翌二十一日午前中に、宿舎から車で一時間二十分を要する藍田県の草堂寺に参詣。この寺は香積寺よりも、さらに西南に位置し、ここに至る行程には田園と山すその樹木の緑、河川の流れを車窓の外にながめることができ、旅の疲れを癒される思いがした。鳩摩羅什三蔵法師の舍利塔に詣で、塔前に佇み報謝の読経を行う。ひとたび堂内に入れば、小堂ながら中央に南面して、八角舍利塔宝龕が安置されている。宝龕の側面には、北宋末から南宋のはじめにかけての能書家と言われる樞邦彦の詩が刻され、正面裏には「姚秦三蔵法師…鳩摩羅什之舍利塔」と刻されていた。樞邦彦の詩は



草堂寺内の鳩摩羅什三蔵法師の舍利塔

鳩摩羅什之舍利塔樞  
邦彦侍□□親來礼

而作偈言丁酉仲秋晦

大士入東土 姚秦喜服膺

当年羅八俊 尽是詰三乘

翻訳明仏旨 円通並祖燈

如何生別派 南北強分明

と、七行にわたって刻されていた。堂前の西側には、「逍遙園大草堂棲禪寺宗派図」という碑が、露天のまま建てられていた。さらに裡院と正門と接待所とをつなぐ廻廊の壁面には、多数の石碑が嵌入されており、また正門のそとに元代の古鐘が安置されている堂があり、その前の通路をへだてた正面の堂内に、もとはおそらく鼓がつるされていたと思われるが、今は詩文に長じた仏教信者であった裴休（七八七？―八六〇？年）の撰文・染筆になり、柳公権（七七八―八六五）の篆額になる「唐故圭峯定慧禪師伝法碑并序」（唐大中九・西暦八五五年刻立）が安置されていた。この草堂寺が、姚興の好遇を得て訳業に励んだ鳩摩羅什に直接関係する遺跡であるか、否かは諸説あって決し難いが、華嚴宗第五祖圭峯宗密（七八〇―八四一年）がこの寺に住したことは、彼の『禪源諸詮集都序』を繙く

ならば、その題下に「終南山草堂寺沙門宗密述」と記されているのによつて明らかである。七十八歳の圓照老比丘尼に別れを告げ、アーチ型をした山門を出ると、右手に靈鷲山を思わしめるような圭峯が望見され、その山すそに圭峯寺があると教えられた。

一旦宿舍に帰り昼食のあと、香積寺に詣でた。大雄殿への参道の両側に花壇が設けられて牡丹が植えられていたが、昨年五月、遠忌記念に植樹した十本のなか、二・三本が枯れかかっている、降雨量の少い土地柄から来る必然を知らされた。堂内に入り本尊阿弥陀仏立像ならびに、善導大師像前にぬかずいて読経。堂内右側には昨年奉納された日本浄土宗道俗による阿弥陀経写経が大きなガラス張ケースに収められていたが、後続を待つかのようには感ぜられた。ついで十三層の大塔へと歩を進めると、一九七八年に訪れた時と同様、塔前の広い空地は青々とした畑と化していたが、塔前に通ずる参道は広く開かれていた。塔内一階の実測に思わぬ時間を費したが、構想をより具体化する上に大いに役立った。清代の乾隆年間に建てられた堂内で、住職の続東法師や常慧法師となごやかな一時を送ったが、今やこの堂は接待所と拓本等を購う売店

の役を果していた。作礼而去して門前に佇めば、昨年とは打って違って、近くにあった民家はとりのぞかれ、黄土が積みかさなった台地はけずりとられ、おそらくバスの駐車場にでもするのであろうか、広場を造成しているのに驚かされた。

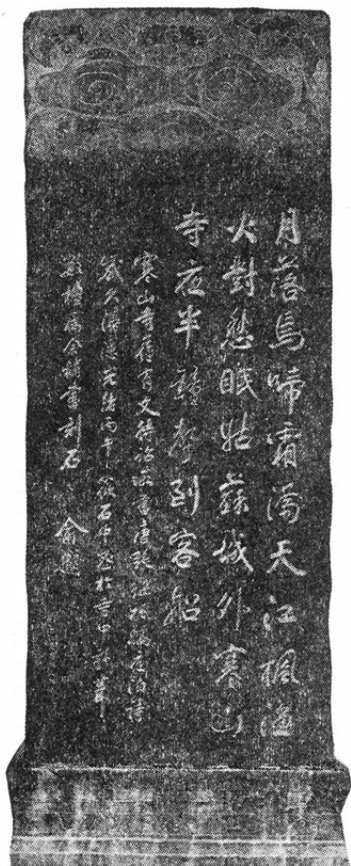
訪中前から西安へ出向いた時には、『浄土源流善導大師香積寺攷』の著者である孫浮生先生を是非おたずねしたいと思っていたが、生憎と上海出張中とのことで、念願をはたせず残念だったが、陝西省博物院（碑林）では宮口君の尽力で、「大唐竜興大徳香積寺主浄業法師靈塔並序」を碑林に見ることができて、大変うれしかった。かの「唐実際寺故寺主懷惲奉勅贈隆闡大法師碑」が、碑林の館のなかに安置されているのに反して、館外の露天に多くの碑とともに壁面にはめこまれていたとは、思いも至らなかったことであつた。二十二日は八時十五分西安空港を離陸し、十時三十五分上海着。ただちに車を走らせて南京路の上海人民飯店で昼食をとる。大勢の中国人にまじつて華僑の青年男女も食事をとっていた。美味しい料理を一杯頂き、マイクロバスで蘇州へ向つた。沿道、昨年の夏の降雨水害による決壊の復旧工事が今なお行われ

ているのを見たり、運河を行き交う各種の船や穀倉地域に恥じない広大な水田等をながめながら、南船北馬の語を実感として受けとめながら、二時間四十分を要して宿舍の蘇州飯店に入った。一泊ではあつたが、目的地の靈巖山寺はいうに及ばず、市内の西園寺、寒山寺、虎丘の斜塔、北寺塔、網師園を歴訪し、古都蘇州の空氣を満喫して翌二十三日夕方、上海へ向つた。

月落烏啼霜滿天 江楓漁火對愁眠  
姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船

とは、唐代の詩人張繼の「楓橋夜泊詩」で、ふるくから日本人に好まれ、愛誦されている。この詩の冒頭の句「月落烏啼霜滿天」と読むべきところを、「月は烏啼に落ちて」と読まれていることを、中国から帰ってから朝日新聞に連載された特集「江南新色」（五月二十三日号・夕刊）を読んで知るに至つた。さらに同記事のなかに、寒山寺山門前の運河にかけられた橋は江村橋と言ひ、「楓橋は寒山寺から見通せない運河を曲つた所にある」と記されていて、楓橋の位置を教えられた。寒山寺には勿論この詩を刻した碑が保存され、寒山・拾得の碑拓とともに売り出している。現存する「楓橋夜泊詩」碑は、清末の儒

寒山寺の八楓橋夜泊詩ノ碑



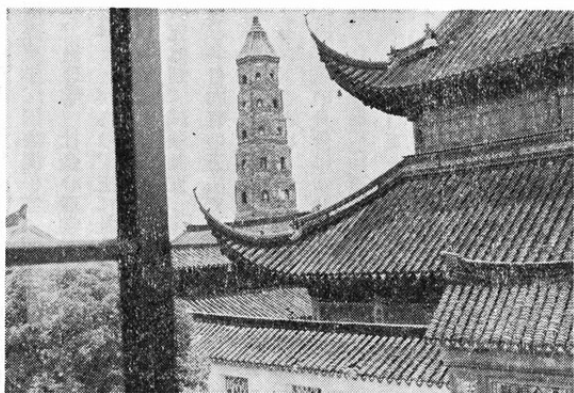
者俞樾（一八二一—一九〇七年）が筱石中丞

の命をうけて染筆したもので、「光緒丙午」と刻されているから一九〇六年の書であることが知られる。この碑には裏面と側面とに、誤字のあるこの詩が世に流布していることを指摘している。特に裏面には俞樾自身が、宋代の王郛公が、かつてこの詩を写して石に刻したが、今は失われて見ることが出来ないが、南宋の龔明之撰になる『中興紀聞』によると、「江楓」が「江村」に作られていることを指摘し、「告観者」として「幸有中興紀聞…在千金一字是江村」と記している。中国は文字の国であり、伝承を貴ぶ民族であること

を、裏面に刻された一文から知り得た。

このたび蘇州をおとずれて驚かされたことは、靈巖山寺で昼食に素齋（精進料理）を頂き、そのあとに出された麵の量の豊さで、いくら頂いても無くならないのには、ほとほと閉口した。また筆者の法類寺院の寺名が刻されている宝暦年間の梵鐘が、西園寺大雄殿内の片隅に吊されているのに出くわしたこと、一九七六年訪中の際、北京飯店での招待宴で同席し、大正末期に大谷大学に留学された頃のことを承ったことのある仏教学者、故高観如先生の令嬢三姉妹（そのなか長女にあたる高立女史が姚長寿居士の令室）に出会うこと

ができたこと、靈巖山寺の山すそに中国人の新旧墓石が列をなしてならんでいるのを見ることが出来たことは、まことに予期しないところであった。紙数の都合上端折ったり、割愛したところ多いことを謝して筆を擱く。



靈巖山寺の蔓と塔

（とうとう）

きょうしゅん

文学部教授

（一九八一・六・二九記）